三吟「鈴蘭」の巻

武井典子・野田朱広・朱牟田恵洲（捌）

発句　鈴蘭や名曲喫茶残る町　典子
脇　鮎の解禁友と待ちわぶ　朱広
第三　悪しざまに言いつつ都会が好きにして　恵洲
年に一度の県人会へ　典
野良に餌やるは日課に明の月　朱
昨日刈らせし首筋の秋　恵
アンデスのもろこし畑雲早し　典
黄色いリボン笑まふ黒髪　朱
恋人は騎兵隊員名画なり　恵
溺れてもいい君の眼の中　典
漂着の孤島に洞窟たつき跡　洲
岩波文庫の褪せた一冊　朱
親の後継いで住職月冴ゆる　典
物臭血筋寝酒欠かさず　洲
横の字を縦に直すも機械にて　朱
てふてふ誘う夕べの散歩　典
惜別の流れ解散花筏　洲
春闘デモが馴れ初めにして　朱
二十年君に預けた主導権　典
ダウ平均に一喜一憂　洲
山奥に庵結んで隠者めく　朱
鳥の図鑑や望遠鏡や　典
より高く天守伸び行く銀杏城　洲
記憶の底よりかの手毬唄　朱
熱帯夜顔の見えないぬらりひょん　典
塗り箸遣い心太食う　洲
世が世なら大伯爵家の当主にて　朱
紳士淑女は死語となりけり　典
金満の代議士夫妻月沈む　洲
紅葉散り浮き鯉肥ゆる池　朱
北欧の雲読みつつの冬支度　典
肘と肘組み交わす乾杯　朱
朗報はベースキャンプに無線にて　洲
木立を人に見せる陽炎　朱
せせらぎをゆけばやがては花の門　典
挙句　梵鐘殷々暮れかねてあり　洲

起首二千二十年五月　七日
満尾仝　七月二十日

表六句（6 句）
初の折の裏（12 句）
名残の折の表（12 句）
名残の折の裏（6 句）
初の折（18 句）
名残の折（18 句）